



角川文庫

—3236—

他人の自由

立原正秋



角川書店



昭和四十九年三月二十日 初版発行

定価は、カバーに
明記してあります

角川文庫

他人の自由

著作者

立原正秋
たち ほん まさ あき

発行者

角川源義

印刷者

村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
一〇二 東京一九五二〇八

株式会社 角川書店
かど かわ しよ てん

電話東京憲七二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

旭印刷・本間製本

0193-129808-0946(0)

他 人 の 自 由

他 三 篇

立 原 正 秋

角 川 文 庫

3236

目次

他人の自由

五

夜の仲間

二三

聖堂の想い出

二〇三

死者への讃歌

二九

解説

武田 勝彦 三七

他人の自由

71

竊廻愚案、粗勘古今、歎異先師口伝之真信、思有後学相統之疑惑。幸不
依有縁知識者、争得入易行一門哉。全以自見之覚悟、莫乱他力之宗旨。

歎異鈔

一

手形詐欺罪の嫌疑で未決に入っていた男のために、地方検察庁に三万円の保釈金をつんで連れだしたのは、二か月前だった。

冬子は男と連れ立ってT署をでて、八月の陽盛りの繁華街を国電の駅に向って歩いた。どこかが狂っていた。二人のあいだには一か月という時間の断絶はあったが、しかしどこかで通い合うものがあっていい筈だのにと思いながら冬子は、横を歩いている男の顔を見あげた。

男はちらと卑屈なわらいをうかべた。瞬間、冬子は、これがあの男だろうか、と戸惑った。男の表情はみじめだった。前年の暮に、冬子のでている酒場にはじめて現れた男は、文字通り颯爽さつそうとしていた。その時分男は、中古車ではあったが、外国製のスポーツ車を乗りまわしていた。なにをやっているのか不明だったが、男は惜し気もなく金をつかった。ちょうど、二年越しに同棲

していた中年の雑誌記者とのあいだがうまく行っていない時だったので、なにかもが変ったかたちで現れた男に冬子は傾いて行った。

雑誌記者には妻子がいた。二年前の春、冬子がある大衆雑誌の出版社の事務員として入社したとき、その編集長をやっていたのが皆川だった。簿記も算盤そろばんもできない冬子は、皆川の秘書のかたちで働いていた。冬子を自分のもとに引っぱった皆川は、冬子のでている酒場の常連だったのである。

三か月たってその出版社がつぶれたとき、冬子は皆川を愛していた。冬子は、一人の雑誌編集者もっている雰囲気雰囲気に眩惑くらくわくされていた。編集者としてはかなり独創的な手腕をもっていたが、大人の目からみたら、すべての点で事物の皮相だけを吸収している男だった。中年の都会人都会人がもっているなにかやりきれない憂鬱憂鬱な雰囲気と、底の浅い適度の虚無的な匂いを男は身につけていた。

そうした皆川を愛しはじめたことを、冬子は誇りに思っていた。妻子のある男を愛したことは、自分が世俗的なものから超越しているからだと思った。

そして皆川が独立して新規に出版社をつくるべく計画しはじめたとき冬子は、以前でていた酒場にまたでることにした。理由は簡単だった。皆川が成功するまで助けてやりたかったのである。ところが皆川は、はじめから計算して冬子とつきあっていた。皆川は冬子と結婚する意志のあ

ることをほのめかした。皆川とのつながりに、世俗を超えたなにかを自分のなかに見出していた冬子も、心のかたすみではそれを期待していたのだ。それからしばらくのこと、皆川の妻が家出したり、子供をどっちが引きとるかなどで、いざこざが続いたが、結局皆川は妻のもとへ帰って行った。皆川への態度はいつも曖昧だった。考えようによっては、皆川ははじめから終りまで、思わせぶりだけで冬子をひきつけていたとも言えた。誠実な冬子を裏切れなくなって、芝居をすることによって結果をだそうとした。もちろんその結果を皆川は最初から考えていた。

皆川はたいへんなドン・ファンだった。ドン・ファンの実態がどんなものであるかを知りもせず、冬子は、そうした男から愛され、愛することに一種の誇りを抱いていた。つまり、ドン・ファンというのは女を見る目が肥えている。そうした男から愛されたということ、女はますます自惚心うぬぼれをつよくするのだった。一皮剥はげば、そこに、ごくつまらない一人の男が存在しているだけのことでしかなかったが、冬子にはそれを見抜くだけのちからがなかった。皆川の曖昧な態度に業ごうをにやした冬子は、ちょうどその時分現れた現在の男、園部をライバルに仕立てて皆川のころをつなぎとめようと試みたこともあったが、のたうちまわったあげくの果ては徒労に終わった。園部は、たいそう変った現れ方をした。単純で直截なものをもっていた。神経質な皆川にくらべると、驚くほどの図太さを身につけていた。園部は明確な線を備えていた。すべてが皆川とは正反対な現れかたをしたのだ。いやおうなしに冬子のなかに進入してきて、どっかと坐りこんで

しまった。皆川とは切れていたわけではなかったから、園部から逃げることであった。ここでも冬子はまた男をよく見なかった。園部は典型的な性格破産者だった。冬子が、単純で直截で明確な線を備えているとみたのは、実は園部の知性のない粗野な面だったのだ。

園部がなにをしているのか冬子をはじめのうちはわからなかったが、詐欺業が園部の仕事だった。かといって悪人でもなかった。園部は自分の悪を体系づけるだけの頭脳と能力を持ち合わせていなかった。

園部は、他の誰もができないような冒険をしたいとか、大金をつかみたいとかいった風に、始終、現実から遊離した夢想ばかりしていた。反面、園部には小細工を弄する一面があった。園部はある私大の経済科をでていると自称し、自分がいかに大きな冒険を夢みているかという証拠に、冬子と同棲をはじめたとき、いろいろな本を運んできた。ほとんど冒険や探険に関する本だった。冬子などにはわからない哲学や歴史、科学の本などもあった。じっさいは園部がそれらの本の内容を理解するちからがないのを冬子が知ったのは、だいぶたってからだった。園部がわかりもしない本を冬子の前に見せびらかしたのは、なんとかして自分を一人前の知識人に見せたいということからだった。浅はかというより涙ぐましい努力だった。

園部と最初の夜をすごしたのは正月二日で、ある三業地にある割烹料理屋だった。手引きをしたのは、冬子と同じ酒場にでている糸子だった。園部は最初から糸子を通じて冬子に近づいてき

たのだった。ちょっと遊びに行くといって糸子と連れ立ってでかけた冬子は、なにかも忘れて崩れてしまい、三日間をその料理屋ですごした。ある意味では皆川を忘れるための行為だった。つまり園部に依頼されて糸子がお膳立てしたところへ冬子はいやおうなしに飛びこんでしまったのである。

それから一週間ほどたった頃、糸子が園部をつれて冬子の間借先を訪ねてきた。午前のこと、冬子はまだ寝ていたが、糸子が園部をつれてきたと言ったとき、冬子は狼狽した。そこは皆川とのかずかずの想い出をつなぐ唯一の部屋だったのだ。その部屋へ、つい一週間ほど前に寝た別の男を入れるわけにはいかなかった。しかし園部は強引だったし、手引きをした糸子は遣手婆さんやりてのような女だった。糸子は若い前衛画家を愛人にもっていたが、彼女が不感症のために、画家とは交渉がなかった。ただ世話好きな性格から愛人をもっているにすぎなかった。だから他の男女の仲をとりもつことも、彼女の変態的な趣味だった。

こうして園部のもとへ走ろうとする冬子に、皆川は、半年とは保つまいと評したが、それが冬子に向って言われたものなのか、あるいは園部に向って言われた言葉なのか、そのとき冬子はきき流したもののだが、それが事実となって現われたのだった。

真昼の太陽が舗道を灼^やいていた。

冬子はもういちど園部の横顔を見あげた。園部はやはり弱々しくわらって応えた。園部はいつも相手の顔をまっすぐ見なかった。冬子がそのことに気づいたのは、同棲してだいぶたってからだった。

冬子は身内がうそ寒くなった。園部と同棲するときまったとき冬子は、それまでの間借先を引きあげて、新しい部屋を見つけた。ひとつきとたたぬうち冬子は、園部が詐欺師であることをうすうすかぎとってしまった。しかしそれを表面にだすことはしなかった。ある面ではたいそう激しい性格である冬子は、そうした園部に未知なものを見出し、それに惹かれていた。そうした面では冬子は相手を批判することも自分を抑制することもできなかった。自分の愛人に、悪に徹している男の映像を勝手に造りあげ、自分のすべてをそこに投げ入れてしまった。冬子はすべてのことに実感主義で通していた。自覚以上のことは、例え目の前にあっても、それを信ずることのできない女だった。彼女は小さい頃から我^がのつよい子だった。そのために、よく母親から打たれた。あやまらなければ食事を与えられなかったが、彼女はあやまらなかった。そうして、ながい一日を人気のない部屋のすみに膝をかかえて、うずくまってすごした。姉がこっそり食事を運んでくれても彼女はふり向かなかった。しまいには母親が折れてでた。子供ながらに母親の仕打ちを残酷に思った。長ずるにしたがい母親を憎みだした。お前達のために苦勞してきたのだから、

お前達は親に孝行すべきだと母親から言われるたびに、彼女は、それが母親の押売りとしか思えなかった。

彼女は母親の愛というものを信じなかったし、そうした自分を不幸とも思わなかった。例え周囲から道楽者だと指弾されても嘘のない生きかたをしている父親の方を信ずることができた。

彼女は子供の時分から友達をつくらなかった。ひっそりと自分だけの世界を求めていた。いつから絵に興味をもちはじめたのか彼女は自分でもはっきりは覚えていなかったが、絵がもっている色彩感の世界だけは無条件に信ずることができた。殊に赤い色をながいことみつめていると、色のなかに吸いこまれて行きそうな眩惑を感じた。赤い色は彼女にとってはもっとも単純で、直截で、明確で、美しかった。赤い色は彼女にかなしいまでの感動をさそった。やがて彼女は実生活の面で赤い色を求めはじめたが、一途であっただけに、相手を識別するゆとりをもたなかった。こうした冬子の感覚に、詐欺師の園部は詭え向きだったのである。詐欺という悪を身をもって実行している男の行動が、冬子の美的感動をよんだのである。衝動的な美への憧憬。悲壮美へのあこがれ。言いかえれば冬子はそんなものをさがし求めて生きていた。

そうして追い求めた結果が、いまこうして白日のもとにさらしだされているのだと思うと、冬子はうそ寒くなった。

——いろいろ苦勞をかけたな。であればすぐ、五十万円ぐらいは儲かる方法があるんだ。じきに

とりかかるよ。

そのとき園部は自分のみじめな姿も忘れて、冬子に虚勢をはっていた。冬子はいっそうみじめな思いがした。華麗であるべき筈だった夏が、こうもみじめになることは予測していなかった。夏になったら別荘を借りきって避暑に行こうと園部は春から提案していたのだ。

それからすでに二か月がすぎている。

冬子は相変らず酒場にでていたが、園部は終日部屋に閉じこもっていた。

冬子が皆川と住んでいた部屋を引きあげてから、現在いる部屋で四回引越しをしてきた。園部が詐欺をするたびに居を変えねばならなかったからである。引越すたびに園部はまとまった現金をつかんでいた。園部と同棲したとき冬子は酒場をやめていたが、園部が留置場に入ると同時に、もとの酒場に勤めだしたのだ。

二

四時になると冬子は店にでる仕度をする。庶民的なごく平凡な顔だったが、化粧をすると個性的な特徴のある顔に変わった。冬子はちゃんとそれを計算していた。眉毛はまわりを毛抜きで抜きとり、細い輪型にした。そこへ墨をひくと、優雅な出来栄だった。目は切れをながくみせて墨

を引いた。ながい睫毛まつげだったので、きわだった目になった。いろがくろい方だったので、口紅は明かるい色をえらんだ。オレンジ色に近い原色の朱だった。こうして化粧をすますと、沈んだ、憂いを帯びた顔になる。髪はうしろで内巻きにした。そして全体的に貴族的な顔になる。冬子はそれを仕あげるのにいつも一時間を費した。それは楽しい一刻だった。

いまま鏡に向って化粧をしている冬子のそばで、園部は朝から何度も読んでいる朝刊に目を通していた。冬子は化粧しながらも、園部が新聞のどこを読んでいるのかを知っていた。園部は何度も同じ求人欄をみていた。詐欺をやるにも、すでにとりつくところがなかった。園部はいつも計画的に詐欺をやるのではなく、ことの成り行きで突発的にやることが多かった。自動車のセールスマンをやっているうち、現金が入用になってくると、そのままずるずると、販売行為が詐欺行為に移行した。テレビのセールスマンをやっているうち、ある程度の期間がすぎて会社にも信用ができてくると、架空の名義人にテレビを月賦で売ったことにして、品物は現金に、かえてしまっていた。

園部はあるとき冬子に、自分はかつて特務機関にいたと語った。特務機関がなんなのか冬子は知らなかった。園部はくわしく説明した。きき終ったとき冬子は、園部の冷酷な性格や、目的のためには手段をえらばぬところや、他人に迷惑をかけてすこしも呵責かしやくを感じないところを、理解できるような気がした。

とにかく園部には計画性がまるで欠けていた。特務機関にいたことを園部は誇りにしていた。悪を標榜して生きていることで、現代の英雄を気どっていた。

いまもいま、園部が求人欄に目を通していることで、もし園部が運よくどこかの会社にもぐりこめたとしても、それからの園部の行動が冬子にははっきりわかっていった。いくつもの無計画な詐欺行為が起きるだけだと思った。しかし冬子は内心のどこかで、園部がそうなるのを望んでいた。

冬子が皆川と別れて園部といっしょになることで、冬子の衝動的な性格のほかに、いくぶんかの打算も加わっていた。冬子は絵をやっていた。いつまでも酒場にでて皆川を助けるよりも、車を取りまわし、割烹料理屋で数日もすごせる自由な身分の男、つまりその男についている限り、自分のこれからの絵の勉強も保証されると思ったのだ。

なんでこんな因果なことになったのだろうと冬子は店にでるたびに自分に腹がたってくるのだが、しかしやはりどこかで園部を愛していた。かつて冬子を惹きつけた園部の魅力が消えてしまったいまとなってもなお何かが残っているとすると、それはなんだろうと冬子は考えてみた。どう考えてもセクス以外にはなかった。すでに男のすべてを知ってしまったいま、計画性のない男が結果的にどうなるかを知りすぎるほど知っているいま、自分がこうして酒場にでて男を養っているのは、やはりセクスのためだと思った。